2017 年度 森泰吉郎記念研究振興基金 研究成果報告書

研究課題名	メディア情報の発信と受容-日独米 3.11 報道比較-		
研 究 代 表 者	佐藤 友紀子	所属・学年	政策・メディア研究科・博士課程 2 年

研究概要

ある地域で発生したニュースが、異なる言語圏で発信・受容される際に報道メディアによる情報伝達の視点・表現手段や目的に差異が見られる。この点を明らかにするために、本研究は 2011 年に発生した東日本大震災(3.11)に関する日本、ドイツ、アメリカで発信されたメディア報道の記事コンテンツを分析・比較する。記事を分析する際、外的な状況を伝達する報道とは相反するキリスト教的なシンボル、メタファー、アナロジーなどの宗教言語の使用と機能に焦点を当て、言語使用の観点からテキスト分析を進める。本研究では調査方法として、**日本、ドイツとアメリカにおけるフィールドワークを中心とする**。**各地における報道アーカイブを利用し全国紙と地方紙の記事収集・テキスト分析**を行い、**分析結果を独自のデータベースに構築する**。同時に、**現地における報道の受容者である読者と発信者であるジャーナリストの意識調査（サーベイおよびインタビュー調査）**を進め、記事に対してそれぞれどのような意識を持つのか調査・分析する。また、現地では報道機関における**記事制作現場の参与観察を実施**する。最終的にテキスト分析、意識調査および参与観察の結果を総合的に分析・考察し、「3.11」報道における宗教言語が表現手段として使用される背景を考察するとともに、言語が異なることによって報道テキストの意味・コンテンツがどのように変容するのか明らかにする。

研究成果

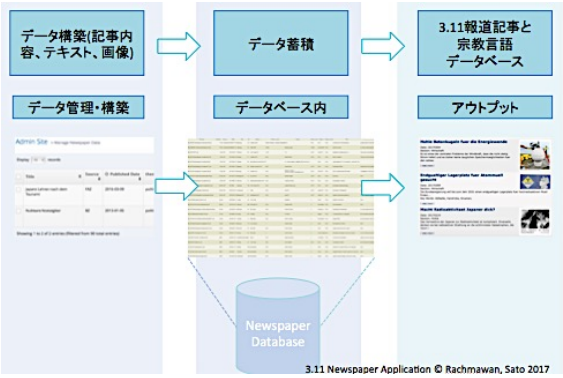
研究の研究対象として、新聞報道記事の発信者が使用する語彙や表現に、対象とする読者層の社会的・文化的背景が明確に反映されることを重要視し、日本語圏、ドイツ語圏および英語圏で発信される新聞媒体を研究対象とする。新聞報道記事のコンテンツを調査対象とすることで、各言語圏における「3.11」関連報道の位置付けと報道に使用される宗教言語の背景並びにその機能の関係性を有効的に分析することが可能となると考える。研究対象を選定する際、新聞社の規模、各新聞メディアが対象とする地域性、読者層、および新聞社の政治的な位置付けを基準に、各言語圏で発信されている複数の全国紙と地方紙を選定した。特に、本調査ではドイツにおいて地域による宗派の違いを考慮し、旧西ドイツ側に拠点を置く新聞社と同時に、旧東ドイツ側を拠点に活動する新聞社を調査対象として選択した。調査対象とする新聞社および新聞媒体に関する属性およびこれまでに収集した 2012 年以降の報道記事の件数は表 1 の通りである。なお、本研究では 2012 年 3 月 11 日以降に発行された複数の新聞報道記事を対象とする。調査データ分析の対象期間を震災翌年以降に設定することによって、各報道機関の視点・考察を伴う記事データを収集し、報道にみられる表現手法の視点の相違を明確にした。

発信言語（国）	対象地域	全国紙	論調	地方紙	論調
ドイツ語圏（ドイツ）合計：2399件	旧西ドイツ地域	Frankfurter Allgemeine Zeitung (197/607)	保守-リベラル	Frankfurter Neue Presse (64/316)	保守
		Süddeutsche Zeitung (149/699)	リベラル	Abendzeitung (37/182)	リベラル
	旧東ドイツ地域			neues deutschland (73/145)	旧東独社会主義統一党（SED）の政党機関紙
				Berliner Zeitung (110/289)	リベラル
				Mitteldeutsche Zeitung (53/161)	中道
英語圏（アメリカ）合計：548件	東部	The New York Times (163/216)	リベラル		
		The Washington Post (63/113)	中道		
	中西部			Chicago Tribune (100/119)	保守
	西部			The Los Angeles Times (50/100)	リベラル
日本語圏（日本）合計：627件 (論調を考慮するため社説を対象)	全国	朝日新聞（154）	リベラル		
		讀賣新聞（118）	中道右派		
		毎日新聞（269）	リベラル		
	「3.11」被災地			河北新報（36）	
				福島民報（50）	

<表 1 収集・分析した報道件数（日本に関するトピック/「3.11」関連報道）>

報道記事のデータを蓄積するデータベースの作成において、記事の記事データ、テキストデータを蓄積するカテゴリーのみならず、報道テキストに浮上する宗教言語、宗教言語が含まれているテキスト、並びに聖書の言語、聖書に準ずる聖典（カテヒスムス、神学用語、典礼書、祈祷書や信仰問答書など）等に見られる宗教言語として定義付けされている語彙および表現がデータベース上に並行して反映される仕様構成を設定・構築した（図 1)。

研究成果



<図 1 データベース利用プロセス>

新聞媒体を対象としたテキスト分析の考察結果が、どの程度実態を反映しているのか、データ分析の結果と人々の意識の間に乖離はあるのか、という点を確認するため、本研究では意識調査を遂行した。特に宗教言語が報道の表現手段として使用されている現象が、報道の発信者および受容者の中でどの程度意識的に捉えられているのか、という点を確認することが主たる目的である。傾向を数値化すると同時に質的調査内容を詳細に分析するため、アンケート調査とインタヴュー調査の両者を段階的に用いる手法をとった。なお、発信側のデータは各言語圏の対象メディア機関で働くジャーナリストを対象としてインタビュー調査を実施した。受容側（読者）のデータは、ドイツとアメリカそれぞれの現地の大学生（学部生・大学院修士学生）を対象とした。対象機関および協力者の属性を以下の表 2 に示す。意識調査で収集したインタビューデータはスクリプト化し、MaxQDA を用いてコーディングを行い、発言内容の傾向を分析する。

地域	報道の発信者（ジャーナリスト）	報道の受容者
ドイツ	Mitteldeutsche Zeitung （Rainer Wozny）	Martin-Luther Universität Halle-Wittenberg, Magdeburg Universität, RWTH Aachen, Ludwig- Maximilians−Universität München
	neues deutschland (Uwe Kalbe, Kurt Stenger)	
	Frankfurter Allgemeine Zeitung (Peter Sturm, Rainer Schulze)	
アメリカ	The New York Times (Martin Fackler, Jonathan Soble)	University of California Santa Barbara, California State University Dominguez Hills, California State University Stanislaus

<表 2 意識調査の対象者>

以下に、ドイツ語圏および英語圏それぞれの報道記事に関する分析および考察の一部を提示する。
ドイツ語圏で発信される「3.11」関連報道で使用される宗教言語の代表的な事例として、キリスト教において終末論が描かれる黙示録“Apokalypse”（アポカリプセ）を示す表現が挙げられる。顕著な例として Frankfurter Allgemeine Zeitung 紙の 2013 年 3 月 9 日付、第 13 紙面に記述された記事では、“*Neuanfang mit Hindernissen*”（困難と共に新しい始まり）という見出しで、被災地における仮設屋台の写真と共に紙面のほぼ全体を占める形で記事が掲載された。この記事の中では、津波の被害を受けた気仙沼市の復興作業をテーマに被災者の生活、困難な経済状況が記述され、冒頭部分に被災地の漁師が答えたとされるインタビュー内容が引用として次のように紹介されている：“*Nach genau 28 Minuten rissen die Fluten die Wände des Fischmarkts in der Nähe des Stadtzentrums ein.* ‘*Es waren Bilder der Apokalypse*’ *erinnert sich Fischer Sanno*”（ちょうど 28 分後、津波が町の中心に近い魚市場の壁を引き裂いた。それはアポカリプセの光景だった、と漁師のサンノが振り返る）(Germis 2013)。ここで気仙沼の漁師のことばとして引用されている“Apokalypse”は、実際の取材で得られた証言とは考えにくい。おそらくは「地獄」「この世の終わり」といった言葉であろうと推察される。ここで着目すべきは、比喩表現として新約聖書における「ヨハネの黙示録」と直結する概念である“Apokalypse”を使用している点である。「ヨハネの黙示録」はキリスト教において、善悪の裁きである「最後の審判」を受けた魂が神によって救済されるか否かを問う象徴的な箇所である。震災および津波の災害を受けた被災者の姿を描写する表現として、この“Apokalypse”が比喩的に使われることによって、被災地の物理的な被害の状況を報道する、という本来の新聞記事の役割は、むしろ被災地に暮らす人々の精神的ダメージの描写に傾向することが推測される。“Apokalypse”が聖書の中で示すのは、終末的苦しみ、神による救済、そして復活までの一連の箇所である。気仙沼の被災状況をドイツの受容者に伝える際に、この宗教言語を通して提示することによって、地盤や家屋の損傷といった具体的な被害と同時に、現地の人々の精神的な「苦しみ」や抽象的な「闇」の部分が表現されていると考えられる。

研究成果	アメリカの「3.11」報道において顕著に見られる事例として、“Limbo”（辺境）という表現が挙げられる。“Limbo” は通常、洗礼を受けることのできなかった魂が原罪に苦しむ場所、あるいは神の恩寵を受けなかった者の魂が永遠の至福を喪失したまま留まる場所（Chevalier&Gheerbrant p.609）を意味する。2013 年 10 月 2 日付の The New York Times 紙、第 A8 面には、“*Japan's Nuclear Disaster Refugees Still Stuck in Limbo*”という見出しで、次のような記事が掲載されている：“*Some have moved on, reluctantly, but tens of thousands remain in a legal and emotional limbo while the government holds out hope that they can one day return.*” (Fackler 2013)。これは、原発事故の被害に遭った福島県浪江町の被災者の生活と日本政府の対応について説明された記事である。 “Limbo”という表現は、記事タイトルと文中において被災者の状態を描写する際に使用されている。ここで着目すべきは、宗教言語を表現手段として用いることによって、現地の被災者の肉体的苦痛や損害状況を事実報道として伝えるというよりも、むしろ被災者の精神的痛みや抽象的な無力感を表現することに重点を置いた報道内容である点である。ここでも、受容者である読者のもつ宗教言語のイメージが、記事の中の言葉から派生するコノテーションと結びつくことによって生じる現象であると考えられる。 <参考文献> Chevalier, J., & Gheerbrant, A. (1996). Dictionary of Symbols (J. Buchanan-Brown, Trans. 2 ed.). London: Penguin Books. Fackler, M. (Oct. 2 2013). Japan's Nuclear Disaster Refugees Still Stuck in Limbo. The New York Times, p. A8. Germis, C. (Mar. 9 2013). Neuanfang mit Hindernissen. Frankfurter Allgemeine Zeitung, p. 13.
課題	現在も 2012 年 3 月から 2017 年の期間中に発行された「3.11」関連記事の収集・調査を継続しており、テキストおよび画像をデータ化した上で、引き続きデータベースへの入力作業を遂行中である。同時に、意識調査の対象者に対する聞き取り調査およびそのスクリプト化も既に複数回の実施が終わり、今後は必要に応じた追跡調査をおこなう予定である。これらの作業を通して「3.11」以降の報道コンテンツのテーマ内容および言語表現の使用傾向の実態および変化を、より中長期的時間の枠組みで捉えることができるのではないかと考える。
調査内容	

2017 年 6 月	ジャーナリストインタビュー （The New York Times） 読者サーベイ
2017 年 8 月-2017 年 10 月	ドイツフィールドワーク ・資料収集（現地図書館） ・ジャーナリストインタビュー (Mitteldeutsche Zeitung, Frankfurter Allgemeine Zeitung) ・報道記事の読者と意識調査 ・ライプツフィヒ大学の学生と学術交流
2017 年 10 月	アメリカフィールドワーク ・報道記事の読者と意識調査 ・カルフォルニア大学の学生と学術交流
2018 年 2 月	ドイツフィールドワーク ・資料収集（現地図書館） ・報道記事の読者と意識調査 ・ハレ大学の学生と学術交流

学会発表 および 論文掲載	2017 年 8 月	Y. Sato, I. Rachmawan, S. Brückner, I. Waragai, Y. Kiyoki. "Combining Formal and Informal Learning: The Use of an Application to Enhance Information Gathering and Sharing Competence in a Foreign Language". The 25th EUROCALL : the European Association for Computer Assisted Language Learning, Southampton, UK, Aug 2017. I. Waragai, Y. Kiyoki, S. Kurabayashi, T. Ohta, Y. Sato&S. Brückner. "Construction and Evaluation of an Integrated Formal/Informal Learning Environment for Foreign Language Learning Across Real and Virtual Spaces". The 25th EUROCALL : the European Association for Computer Assisted Language Learning, Southampton, UK, Aug 2017. Y. Sato, I. Rachmawan, S. Brückner, I. Waragai, Y. Kiyoki. “Combining Formal and Informal Learning: The Use of an Application to Enhance Information Gathering and Sharing Competence in a Foreign Language”. In: CALL in a climate of change: adapting to turbulent global conditions – Short papers from EUROCALL 2017. I. Waragai, Y. Kiyoki, S. Kurabayashi, T. Ohta, Y. Sato&S. Brückner. "Construction and Evaluation of an Integrated Formal/Informal Learning Environment for Foreign Language Learning Across Real and Virtual Spaces". In: CALL in a climate of change: adapting to turbulent global conditions – Short papers from EUROCALL 2017.
	2017 年 11 月	Y. Sato. “The Function of Religious Language in the Media -Comparative Coverage Analysis in German, English and Japanese about the 3.11 Earthquake, Tsunami and Fukushima Disaster-”. Keio University SFC ORF 2017, Tokyo. S. Brückner, Y.Sato. “Collaborative Research with Cygames: Comparative Analysis of International Reception of Japanese Video Game Titles Focused on Europe and USA”. Keio University SFC ORF 2017, Tokyo Y. Sato. Panelist at “Practical English in Globalized Japan”. Keio University SFC ORF 2017, Tokyo.
	2017 年 12 月	S. Brückner, Y. Sato, I. Waragai, S. Kurabayashi. “The Handling of Personal Information in Mobile Games”. ACE 2017 14th International Conference on Advances in Computer Entertainment Technology. London, UK, Dec 2017. S. Brückner, Y. Sato, I. Waragai, S. Kurabayashi. “The Handling of Personal Information in Mobile Games”. Proceedings of ACE 2017 14th International Conference on Advances in Computer Entertainment Technology.